

■ PCN だより

PCN Volume 70, Number 1 の紹介

Psychiatry and Clinical Neurosciences, 70 (1) には、PCN Mini Review が 1 本、PCN Frontier Review が 2 本、Regular Article が 4 本掲載されている。国内からの論文は著者による日本語抄録、海外からの論文は PCN 編集委員会の監修による日本語抄録を紹介する。

(国内からの論文)

PCN Frontier Review

1. Multidimensional anatomy of 'modern type depression' in Japan: A proposal for a different diagnostic approach to depression beyond the DSM-5
T. A. Kato*, R. Hashimoto, K. Hayakawa, H. Kubo, M. Watabe, A. R. Teo and S. Kanba

*Department of Neuropsychiatry, Graduate School of Medical Sciences, Kyushu University, Fukuoka, Japan

日本における「現代型うつ」の多次元的分析：DSM-5 に縛られない、異なるうつ病診断アプローチの提唱

日本におけるうつ病の古典的なプロトタイプはメランコリー型うつ病であり、その基盤となる病前性格として 1930 年代に下田光造が提唱した執着気質が知られている。しかし、2000 年頃から若年層を中心に新しいタイプのうつ病態が台頭してきた。マスメディアが「現代型うつ」と名づけたこの病態は、正式な医学用語とみなされていないにもかかわらず、急速に一般市民に浸透した。また、診断や治療に関するガイドラインについてコンセンサスが得られておらず、現代型うつに関する科学的知見が乏しいため、日本国内の臨床現場でこの病態を扱う際に混乱が生じている。本稿では、現代型うつに関する現状と課題について、歴史的、診断的、心理社会的、および文化的見地からまとめて検討する。また、現代型うつが日本固有の現象ではなく、社会文化的あるいは歴史的に異なる背景をもつ他の多くの国でもみられるという海外からの報告も紹介

する。これをもとに、現代型うつが日本の文化に特有の現象であるのか、それとも ICD や DSM に含まれるような国際的な診断基準を用いて分類が可能なものであるのかを考察する。現在のうつ病診断システムの混乱への対応策として、現代型うつを含むうつ病態への新たな診断アプローチをここで提唱する。

Regular Article

1. Effectiveness of suicide prevention gatekeeper-training for university administrative staff in Japan
N. Hashimoto*, Y. Suzuki, T. A. Kato, D. Fujisawa, R. Sato, K. Aoyama-Uehara, M. Fukasawa, S. Asakura, I. Kusumi and K. Otsuka

*Department of Psychiatry, Graduate School of Medicine, Hokkaido University, Sapporo, Japan

大学事務職員を対象としたゲートキーパー養成研修の効果に関する研究

【目的】自殺は、長年にわたり日本人大学生の死因第 1 位を占めている。自殺を考える大学生が専門機関に相談する割合は低く、学生と日常的に接する大学事務職員が自殺を考える学生に気づき、専門機関につなげることは重要だと考えられる。ゲートキーパー養成研修は、メンタルヘルス非専門職の人が、自殺を考える人に気づき、専門機関につなぐ方法を学ぶプログラムである。本研究の目的は、大学事務職員にゲートキーパー養成研修を行い、その効果を検証することである。【方法】メンタルヘルスファーストエイドに基づき、講習、ビデオ視聴、ロールプレイからなる 2.5 時間の研修プログラムを開発し、北海道大学の事務職員 76 名に実施した。研修の前後および 1 ヶ月後に、自殺を考える学生に介入するための知識と自信、ゲートキーパーとしての行動、および姿勢について、自記式の質問紙を用いて評価した。【結果】研修の前後で、知識、自信、行動の各項目に有意な改善を認めた。これ

らの改善は1ヵ月後のフォローアップ調査でも持続していた。参加者の95%がプログラムが有用であると評価しており、60%以上が研修後1ヵ月以内に何らかの形で、研修で習得したスキルを使用したと回答した。
【結論】 大学事務職員を対象としたゲートキーパー研修が有効である可能性が示された。標準的な講習会との差違を無作為化試験で検証すること、より長期間の効果の持続を測定することが、今後の課題である。

(海外からの論文)

PCN Mini Review

1. Relevance of culture-bound syndromes in the 21st century

A. Ventriglio*, O. Ayonrinde and D. Bhugra

*University of Foggia, Foggia, Italy

21世紀における文化依存症候群の妥当性

初めて文化依存症候群が記述されたのは60年以上前である。基本となる前提は、ある種の精神医学的症候群は特定の文化に限定されるということである。症状の受け止め方や解釈、助けをどこに求めるかなどに対する文化の影響は疑う余地がない。苦痛の表現にどのような慣用句を用いるかは文化によって決まる。急速な国際化および産業化により世界は縮小し、文化は他の文化の影響をますます受けるようになっていく。これにより文化依存症候群がよくみられた世界の一部地域は社会的・経済的に変化した。本レビューでは、ダート (dhat) 症候群 (精液喪失不安症) の例を用いてこれらの変化を説明する。DSM-5では、症候群の数が減少しており、これら症候群の病態は変わりうるものと認識されている。臨床医はさまざまな精神医学的症候群の病態に影響を及ぼしうる社会的・経済的变化に注意する必要がある。

PCN Frontier Review

1. Tobacco smoking: From 'glamour' to 'stigma'. A comprehensive review

J. M. Castaldelli-Maia*, A. Ventriglio and D. Bhugra

*Department and Institute of Psychiatry, University of São Paulo, São Paulo, Brazil

喫煙: 「魅力」から「汚名」へ包括的レビュー

本記述レビューでは、タバコの歴史、過去における賛賞や魅力とそのイメージ、興味深いことに、その後広告や映画によって宣伝され変遷を遂げた工業生産品の大量消費について述べる。次に世界の一部地域でタバコが望ましくない製品とされるようになった新たな段階を説明する。喫煙による健康被害が周知されているにもかかわらず、特に新規市場で喫煙者が増加し続けており、タバコにひきつけられる若者が跡を絶たない。本レビューではまた、世界中の消費普及率の動向、喫煙者に対する差別、軽いおよび/または断続的喫煙者、および電子タバコ (e-cigarette) の観点から現在の喫煙行為について調査する。われわれはこれらの変化を神経科学的な見地で位置づける。これにより、西欧諸国における禁煙の重圧にもかかわらず、タバコの認知作用が消費を支える重要な強化因子となりうる理由がうまく説明できるであろう。

Regular Article

1. Baseline symptom severity predicts serotonin transporter change during psychotherapy in patients with major depression

M. Joensuu*, P. Ahola, P. Knekt, O. Lindfors, P. Saarinen, T. Tolmunen, M. Valkonen-Korhonen, R. Vanninen, T. Jaaskelainen, E. Virtala, J. Kuikka, J. Tiihonen and J. Lehtonen

*Department of Forensic Psychiatry, University of Eastern Finland, Kuopio, Finland

ベースラインの症状重症度は大うつ病患者における精神療法中のセロトニントランスポーターの変化を予測する

【目的】 現在のところ、うつ病の病態生理におけるセロトニントランスポーター (SERT) の役割は明らかにされておらず、数件の追跡調査試験が行われたにすぎない。本試験は、大うつ病患者における精神力動

的精神療法中の SERT 利用率の変化を 12 ヶ月または 18 ヶ月の追跡調査で測定した。【方法】調査にあたり、ヨウ素 123 標識 2β-carbomethoxy-3β-(4-iodophenyl) による単一光子放射断層撮影 (SPECT) の連続画像および症状の臨床評価尺度を用いた。【結果】SERT 利用率の変化と症状の変化に相関は認められなかったが、症状チェックリスト抑うつ尺度 (Symptom Check-list Depression Scale) および症状チェックリスト式全般的重症度指標 (Symptom Checklist Global Severity Index) を用いて測定したベースラインの臨床症状重症度により精神療法中の中脳の SERT 利用率の変化が予測された。カットオフ値を用いた評価では、ベースラインの症状重症度が高い患者では SERT 利用率が上昇し、ベースラインの症状重症度が低い患者では減少することが認められた。【結論】これらの結果から、うつ病患者では SERT が減少するとのわれわれの先の知見とあわせ、うつ病における SERT 利用率の減少が状況依存性の変化であると同時に代償的役割を果たしている可能性が示唆された。

2. Current prescription pattern of maintenance treatments for bipolar patients in Korea : A focus on the transition from acute treatments

H. R. Song*, Y-J. Kwon, W-M. Bahk, Y. S. Woo, H-B. Lee, J. Lee, D-B. Lee, S-Y. Lee, M-D. Kim, S. Won, K. Lee, I. Sohn, J. G. Lee, Y-C. Shin, S. Chung, S. Jang, Y. M. Jae and B-H. Yoon

*Department of Psychiatry, College of Medicine, Soonchunhyang University Cheonan Hospital, Cheonan, Korea

韓国における双極性障害維持療法の現行処方パターン：急性治療からの移行に焦点を絞った研究

【目的】本研究では回復した双極性障害患者の維持療法における処方パターンを検討し、急性治療との比較を行った。【方法】後方視的検討によって、急性エピソード後、臨床的に回復期にある双極性障害患者〔臨床全般印象度-双極性障害版 (CGI-BP) スコアが 6 ヶ月間 2 以下〕を対象とした。寛解時と最低 6 ヶ月の維持期間後の処方パターンの違いを精査した。【結果】計 340 例の双極性障害患者が選ばれた。維持期間中、半数以上の患者 (192 例:56.5%) が気分安定薬 (MS)

と抗精神病薬 (AP) を併用していた。MS の中で最も多く処方されていたのはバルプロ酸 (149 例:43.8%) で、次いでリチウム (98 例:28.8%) であったが、患者が維持療法に移行するにつれリチウムの使用が減少し、ラモトリギン (86 例:25.3%) の使用が増加した。よく処方された AP はクエチアピン (125 例:36.8%)、アリピプラゾール (67 例:19.7%)、リスベリドン (48 例:14.1%)、およびオランザピン (39 例:11.5%) であった。維持療法におけるオランザピンの使用は急性治療での使用 (67 例:19.7%) と比較し大きく減少した。患者の多くは抗うつ薬 (AD) を服用していなかったが、1 剤以上の AD を使用していた割合は維持期間中に増加し (17.9% から 30.3%)、最もよく処方された AD は bupropion (28 例:8.2%) であった。用量はすべての薬剤で減少したが、ラモトリギンの用量は 133.2 ± 68.5 mg/日 で維持された。【結論】双極性障害の維持療法で最もよく処方された組み合わせは MS+AP であった。AP の使用は減少したが、MS および/または AP との併用による AD の使用は増加した。維持期間中、ラモトリギンを除き、MS および AP の用量は一般に減少した。

3. Frontolimbic neural circuit changes in emotional processing and inhibitory control associated with clinical improvement following transference-focused psychotherapy in borderline personality disorder

D. L. Perez*, D. R. Vago, H. Pan, J. Root, O. Tuescher, B. H. Fuchs, L. Leung, J. Epstein, N. M. Cain, J. F. Clarkin, M. F. Lenzenweger, O. F. Kernberg, K. N. Levy, D. A. Silbersweig and E. Stern

*Functional Neuroimaging Laboratory, Department of Psychiatry, Brigham and Women's Hospital, Boston, USA

境界性パーソナリティ障害における転移焦点化精神療法後の臨床的改善に関連した感情処理および制御の前頭・辺縁系神経回路の変化

【目的】境界性パーソナリティ障害 (BPD) は、衝動性や情動不安定性といった自己制御の欠如を特徴とする。転移焦点化精神療法 (TFP) はエビデンスに基づく治療法であり、BPD の複数の認知・情緒領域で症状を改善することが認められている。本パイロット試

験は、BPD 患者における TFP 後の感情および行動制御に対する臨床的改善に関連し、改善を予測する神経活性を検討することを目的とした。【方法】BPD 患者 (n=10) を対象に、被験者内計画により TFP 前および TFP 後について検査した。障害特異的な感情-文字刺激 go/no-go 課題下で機能的磁気共鳴画像法 (fMRI) を用いて、ネガティブ感情の処理と制御との相互作用を調査した。【結果】分析結果から治療に関連した有意な効果が認められ、治療前と比較し治療後では背側前頭前野 (背側前帯状回, 背外側前頭前野, および前頭極皮質) の活性が上昇し、腹外側前頭前野および海馬の活性が低下した。制御に対する臨床的改善は、左

背側前帯状皮質活性の上昇と正の相関を示した。情動不安定に対する臨床的改善は、左内側後眼窩前頭皮質/腹側線条体の活性と正の相関を示し、右扁桃体/海馬傍回の活性と負の相関を示した。治療後の制御に対する改善は治療前の右背側前帯状皮質の低活性により、情動不安定に対する改善については治療前の左内側後眼窩前頭皮質/腹側線条体の低活性によりそれぞれ予測された。【結論】本試験の予備的結果から、TFP に関連した前頭・辺縁系回路の変化が認められ、精神力動的療法の手がかりが得られた。